

今日も今日とてあまのじゃく

2025年第2号(通算第24号) 「ぼく、という存在②」

学習塾アイデア 塾長エッセイ

2025年3月1日 記

高校3年の7月に大学の進学を決意してからは、まさに受験中心の生活となった。

といっても、前号で書いた通り僕は野球ばかりしていた高校生で、(好きな歴史をのぞいて)勉強をする習慣がなかった。進路指導室で、大学受験の仕組みを調べ始めたのが、高校3年の7月である。

もちろん、僕の周りがみな受験に賛成だったわけではない。友達からは無理だと言われ、一部の学校の先生からは「一浪でも御の字」と言われた。その反応は当然で、当時の僕は、学年120人のうち、100位前後をフラフラしていた生徒だったのだ。

全国の自治体が大量に地図上から消えていった「平成の大合併」で、僕の故郷もその町名が消滅したが、僕の受験の頃はまだその前で、町の人口は6000人ほどだった。その町には、予備校どころか学習塾もない。高校受験対策の学習塾なら車で片道30分の隣町にあったが、大学受験対策のための予備校までは、車で片道1時間以上かかった。だから、頼れるのは高校の先生方だけだった。幸いと言っていいのか、国語と地歴公民だけは自分で勉強できた。英語も、もともとは好きだったから、覚える単語数を増やすだけ。問題は、センター試験(当時)で必須の数学と理科だった。今でも折を見て面倒を見てくれる担任の先生が数学科だったので、数学はその先生にすぎた。理科は、根っからの文系頭の僕の実力を考慮し、計算の少ない生物と地学で勝負することにした。地学は、授業で履修していなかったが、偶然地学専門の先生が1年生所属でいたので、学年団の先生が頼んでくれて、放課後に毎日、受験用の授業をしてくれた。

とにかく、先生方も前代未聞な僕の挑戦を全力で応援してくれた。僕は、6時間目終了後に1年の教室で地学の授業をマンツーマンで受け、その後も教室に残って数学の勉強をした。担任の先生の部活が終わる18時ころ、質問をしに職員室に行く、だいたい、その後1時間は数学の授業となった。20時前に帰宅し、風呂と食事を30分で済ませ、地学と数学の復習をし、23時過ぎからが文系の時間。本当に時間が惜しいから、食卓テーブルにも、汚い話だがトイレの中にも、専用の英和辞典が置いてあり、自宅のどこにいても手を伸ばせば届くところに置くため、家の中には同じ辞書が5冊置いてあった。午前2時過ぎに寝て、午後6時には起きて前日の復習をした。そこまでして、やっと掴んだ大学合格だった。

大学では、2年間の教養を終えて、教育計画論を専攻に選んだ。大学進学を決意するきっかけとなった、あの故郷の博物館の恩師である学芸員の先生との約束を果たすため、学校の教育課程に地域の教育資源をどのように活かすべきなのか、に強い関心をもっていた。人並みの大学生活を送り、故郷の隣町にご縁をいただいて、博物館の学芸員を3年間やったが、自分の学問的未熟さを痛感し、母校の大学院に進学し直した。研究室の教授には、「君は現場で力を発揮すべき人材だから、修士をとったら現場に戻りなさい」と言われていたのもあり、道北の過疎地域を事例に修士論文を書いた後、道東の町の教育委員会に就職した。

そこでは、「幼稚園から高校までの一体化した教育課程の作成とその実践」という一大プロジェクトの仕事任せてもらったが、やりがいのある仕事の毎日と引き換えに、心の病気にも罹患してしまった。

就職してから7年目の冬、僕は精神科の閉鎖病棟の中にいた。入院してひと月ほどの記憶はほとんど無く、記憶が定着してきた頃、病棟の中にある食堂で、ひとり勉強をしているある中3の女子と出会った。話をすれば、中1の頃から入退院を繰り返し、ほとんど学校で勉強もしていないが、なんとか高校には行きたいとのこと。お互いの主治医の許可を得て、1日に2時間だけ一緒に勉強することになった。入試まであと3ヶ月といった時期だったが、彼女は向学心にあふれた子であった。彼女と一緒に勉強しながら、僕自信、教育というものを勉強してきたのに、制度から漏れてしまった彼女のような子のことを一切考えてこなかったことを痛感した。そして、大学受験の時の僕も、目の前にいる彼女も同じように、日々、積み上げていくことをしなかった勉強のツケを、一度に返すのは並大抵なことではないことを悟った。だから、子どもたちがどんな状況になっても困ることがないように、「勉強を習慣にできる仕事をしよう」と決意した。

入試の一週間前に退院した僕に、彼女から病院から実家を經由して合格のお手紙が届いた時、僕はすでに札幌にいた。今から、9年前のことである。